津高同窓会報

発行所
〒514-0042 津市新町3丁目1-1
津高等学校
同窓会事務局
TEL・FAX 059-229-7331
共立印刷株式会社

ご挨拶 …… 2
創立百三十五周年記念事業決まる 2
学徒動員 …… 3
県立高女の思い出 …… 4
歴史小説への挑戦 …… 4
人のために灯をともせば、わが前明らかなるが如し …… 5
インディアナ大学教授として …… 5
津高校電気部同窓会のお誘い …… 6
「ぼったくりの人」と呼ばれて …… 7
最後の日本兵 …… 7
津高同窓会旅行 …… 8
学年対抗ゴルフ大会 …… 8
有造塾に参加して …… 9
第四回津高同窓会テニス大会 …… 9
国体山岳競技優勝 …… 10
津高校進路指導状況 …… 10
岡村初博元同窓会長を偲んで …… 11
各地で同窓会開催 …… 11
平成二十七年度同窓パーティー …… 12

礎～こころかしら～

同窓会長　飯田　俊司（昭和36年卒）

会員の皆様には、如何お過ごしでしょうか。平素は同窓会活動に格別のご支援、ご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

本年の同窓会活動を振り返ってみますと、本部（津）、東京、大阪、名古屋の各同窓会は多数の参加者の下、盛大に開催されました。

また、在校生を交えての有造塾やテニス大会、学年対抗ゴルフ大会もすっかり同窓会活動として定着し、会員相互間の親睦向上に大いに役立っています。各事業の企画、運営にご尽力をいただいた役員、幹事、世話役の皆様に心よりお礼申し上げます。

さらに、同窓会員・家族による五泊六日のインドネシア旅行（バリ島、ジャワ島の仏教遺跡ボロブドゥール）にも出掛け、年齢の壁を越えて大いに絆を強めることができました。

今年は、私にとって海外旅行の機会が三回あり、同窓会の旅行のほか、家族とのケニア旅行やイタリア・スイスへの団体旅行にも参加しました。

「海外に行くと愛国者になる」とよく言われますが、安全性、清潔さ、豊かさ、規律正しさ、穏やかさなどつくづく日本はいい国だと実感しています。

先般、日本創成会議が「日本は二〇四〇年には出産人口の九五%を占める二十歳～三十九歳の女性人口が、二〇一〇年に比べると五割以下に急減する自治体が全体の四九・八%に上る」という推計結果を発表しました。

若い女性が地方から大都市に移動する結果、日本の市町村の半分が「消滅可能性都市」になり、一方で大都市の出生率は全国最低であります。大都市に若者を供給してきた地方が消滅すれば、やがて大都市の人口も減少して、日本全体の人口減少が加速化していくことを予測しています。

これまで、列島改造論、田園都市構想、地方の時代、地域主権などなど地方の開発・発展を目指すビジョンが出され、政策がとられてきたにもかかわらず、むしろ東京一極集中が進んできました。安倍政権は担当大臣をおいて、「地方創生」に真剣に取組もうとしています。今度こそ地方が活性化し、人口減少社会化への歯止めができることを期待したいものです。もとより、国に頼るばかりでなく、地方自らが創意・工夫する努力が不可欠であることは言うまでもありません。

個人としては毎朝のウオーキングコースで、里山や田圃や畑に四季の移り変りを感じ、出会う人達との「おはようございます」の挨拶は何物にも代えられないと、地方の生活に満足しているのですが、年のせいでしょうか。

来年は津高創立百三十五周年を迎えます。同窓会としましても幾つかの記念事業を計画しておりますので、会員皆様のご支援・ご協力をお願いします。

「はじまるときとおわるとき」F50号3点組作品

2013個展の案内はがき写真として、津高校弓道場の裏で撮影。
2014年の外構改修工事のため、後ろに写っているブロック塀や雑木はなくなってしまいました。　津高校美術科教諭　小野 道宏（オノ・ミチ・ヒロ）

タイトル・書　工藤雅俊（昭和45年卒）

ご挨拶

学校長　小野芳孝

会員の皆様には、ご壮健にてご活躍のこととお慶び申し上げます。平素は、本校教育活動に様々なご支援、ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

昨年度一年間に、総会など様々な同窓会の催しに参加の機会を得て、会員の皆様が母校をこよなく愛し、強い結束力で運営にあたっている同窓会組織は全国的にも珍しく、素晴らしい同窓会であると改めて深く感銘を受けております。今後も津高の歴史と伝統を大切にしながら、さらなる津高の発展のために努力を惜しまず頑張っていく所存です。

現在、本校は「高い知性と教養を持ったリーダーの育成」を使命と捉え、「知・徳・体の調和のとれた生徒を育成する『公立進学校』をめざす」ことを基本理念として、日々様々な取組を行っています。この使命と基本理念を支えているもの、そしてその実現に欠かすことができないものは、津高に脈々と受け継がれてきた原点である「自主・自律」、「文武両道」の精神であると考えています。

今年度の生徒の部活動等での活躍を紹介します。県総体学校対抗総合成績で男子四位、女子十四位、詳細はボート部、水泳部のインターハイ出場をはじめ、テニス部男子、バスケット部男子、軟式野球部、陸上競技部が東海大会に出場しました。二年生山田隼也さんが『第八回日本ユース陸上競技選手権大会（全国大会）』に三段跳びで出場、一年生田嶋あいかさんがクライミングで国際大会に日本代表として出場するなどすばらしい活躍を見せてくれました。一方、文化系クラブでも書道部三年生長谷川佳奈さんが第三十八回全国高等学校総合文化祭茨城大会書道部門で朝日新聞社賞受賞、音楽部は第六十七回全日本合唱コンクール中部大会に出場、また、第八十一回ＮＨＫ全国学校音楽コンクール東海北陸ブロックコンクールに三重県代表で出場し、ＳＳＣ（スーパーサイエンスクラブ）化学部会の三年生清水優孝さんが「化学グランプリ2014」において、一次選考を突破し全国大会で銅賞を受賞するなど大いに活躍してくれました。

会員の皆様におかれましては、今後とも母校に対するご支援をお願い申し上げますとともに、ますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げましてご挨拶といたします。

創立百三十五周年記念事業決まる!!

来年は津高創立百三十五周年を迎えます。そこで、同窓会では例年と違った事業を企画いたしました。

旅行、ゴルフ、講演会、そして名簿の発刊です。

それぞれに、魅力のある企画になっていますので、詳細をご覧いただき多数のご参加をお待ちしています。

記念旅行　四月二十日（月）～二十九日（水）

～緑濃き美食スペイン・水の都ブルージュを巡る～
スペイン・ポルトガル・ベルギー　三ヶ国十日間の旅

創立百三十五周年の記念旅行として、旅行会社の店頭にはない独自の魅力的な旅をと、ＪＴＢと共に練り上げ、企画致しました。

先ず、北スペインのキリスト教の巡礼地でもあり、三大聖地、エルサレム・バチカンと並ぶサンチャゴ・デ・コンポステーラに飛び、スペインの誇る国営ホテル五ツ星パラドール、ザ・サンチャゴに宿泊します。

次ぎに西に下り、国境を越え、ポルトガルの国の名の由来ともなり、ポートワインでも有名な歴史地区ポルトに連泊します。

その後、ベルギーのフランダース地方へ飛び、「世界一美しい広場」グラン・プラスのあるブリュッセルに連泊。その際、ひと味違った鉄道を利用し、「ヨーロッパ一美しい」ともいわれるアントワープ中央駅を経由して、『フランダースの犬』のネロ少年が憧れ続けた絵のあるノートルダム大聖堂を見学します。そこでは、自由行動の時間も設け、ショッピング、ビール等をお楽しみいただけるかと思います。

最後に水の都、中世そのままの街並みを残すブルージュを訪れます。

毎日、数々の世界遺産を眺め、スペイン料理、ワイン、ワッフルと滋味溢れる多彩な食、美食の国を訪れ、チョコレート・ダイヤモンド等のショッピングを大いに楽しんでいただこうとの企画です。

今回、行程的にもゆったりと、二都市二連泊を取り入れました。

同窓会の旅は、行かれた方には「少し料金は高めではあるが中身は最高！」とご好評をいただいております。

是非、ご夫婦、同期のお友達など、

サンチャゴ・デ・コンポステーラ

お誘い合わせの上、ご参加下さい。楽しい旅にいたしましょう。

記念ゴルフ大会（個人戦） 五月十日（日）

創立百三十五周年記念ゴルフ大会を開催します。個人戦となります。ふるってご参加ください。

日　程　平成二十七年五月十日(日)
場　所　三重白山ゴルフコース
（津市白山町川口）
（〇五九―二六二―四〇一一）
参加費　一二、五〇〇円
（プレー費・昼食・コース売店・パーティー代・賞品代含む）キャディは別途
定　員　一六〇名（定員になり次第〆切）
競技方法
十八ホールストロークプレー
お申込方法

尚、詳細は折り込み別紙をご覧ください。

同窓会名簿発刊

同窓会員名簿『あゝ母校』 平成二十七年一月七日発刊

皆様に、住所確認はがきなどでご協力いただきました名簿を平成二十七年一月七日に発刊いたします。

刊行にあたり、個人情報保護の精神を十分に尊重するように配慮し、名簿委託会社サラトと共に進めてまいりました。

今回の名簿が母校と同窓会員相互の掛け橋となり、会員相互の結びつきを一層強める絆となり、同窓会活動の活性化につながっていくことと願っております。

・一冊　五、〇〇〇円
（税・送料を含む）
・お申し込み先
平成二十六年十二月末日までは
㈱サラトへお申込ください。
TEL　0120―138―000

ハガキ・FAX・メールに左記の事項をご記入の上、お申込み下さい。

・名前・住所・電話番号・性別
・生年月日・卒業年度・HC

申込締切　平成二十七年二月二十八日
（定員になり次第〆切）

※個人戦ですが、同学年では十六名を　上限とします。

お問い合わせ・お申し込み先
津高同窓会事務局
TEL　059―229―7331

記念講演会

記念事業として「第五回有造塾」の拡大版の講演会を企画しています。

現在、講師・日程等を交渉中です。決まり次第、ホームページにてご案内致します。

学徒動員

大森　芳一（昭和20年④卒）

昭和十六年、旧制中学に入学した私は二十一年に卒業する予定でした。当時は太平洋戦争の激しかった頃で昭和十八年に四年修了で卒業させられる事になり、昭和二十年三月に当時一年上の五年生の方々と同時に卒業しました。しかも在学中の三年生の頃から近隣の農家へ稲刈り等の手伝いに出され、遂には昭和十九年の夏頃から津市上浜町にあった三菱航空機の工場へ動員され通学ではなく通勤となりました。

今は大和ハウスと積水ハウスの団地になっていますが、以前は紡績工場があり、そこへ三菱航空機名古屋製作所の一部が移転して海軍の戦闘機「雷電」の翼を作っている工場でした。そこで作っている零戦の翼が移される事になり、その製作法の見習いに名古屋へ集団移転となったのです。当時は食物も少なく、たまの休日でも気分転換する所もありませんでした。その上残業の連続や夜勤迄させられたものです。十九年十二月には東海地方に大地震があり津の工場は大損害を受け、更に一週間位してからB29の爆撃を受け名古屋の工場は潰れました。

この様な状況下で十六才の不器用な中学生の私が零戦の翼を作ったのですから満足に飛ぶ筈がありません。出撃命令を受けて、この零戦で飛び立っても途中で引き返して命拾いした人もあったかも知れません。十九年の末に津へ戻り前記の工場での勤務が続きました。その翌年の三月に四年で卒業させられた次第です。

この様な体験は今後絶対にあってはいけません。あれから約七十年、幸い日本は平和を保ってきました。今、集団的自衛権とか何とか言われていますが、絶対に戦争は避けねばなりません。今の若い人達に私の少年時代の様な体験を絶対にして頂きたくありません。

ベートーヴェンの像の前で（徳島県・板東）

県立高女の思い出

井田　知恵（大正9年卒）

明治三十六年生まれの私が津高女に入学したのは、大正四年でした。ちなみに、母は県立高女を中退しましたが一回生として学び、妹二人も同窓、弟も津中学校へ進みました。

生家が久居でしたので、当時教鞭をとられていた湯浅先生宅の離れに先輩方と寄宿し始まった女学校生活でしたが、百年近く経った今も鮮やかに思い出されます。

清水校長先生の教育は、質実剛健、例えば着物も絹ではなく木綿を着用するきまりでした。

月に一度、全校生徒が縦割りの二班に分かれ学校の周囲を時計まわり、反時計まわりに歩く「月なみ遠足」の授業もありました。

畑の間の道をただひたすら歩くのが最初は辛く、慣れれば又退屈でしたが、丈夫な足腰で過ごせたのはこのお蔭かもしれません。

夏休み前これも全校で近くの海岸へ出向く行事もありました。

裾をからげて海へ入り「たてぼし」の魚を手でつかまえ大鍋で煮て皆で食べたのは楽しい思い出です。

教科の中で一番好きだったのは理科でした。お作法室では、お裁縫の他に茶道と華道の授業も行われました。

茶道は、結婚後裏千家に入門し百歳まで続け、家元より名誉師範をいただくに至りましたが、初めて「お茶のおけいこ」をしたのはお作法室でした。

卒業後も東京在住の同窓生は学年をこえてよく集い助け合い、故郷を離れた東京で大変心強いことでした。思い出はつきません。

育み支えて下さった先生方や三重桜の方々に感謝し、母校のさらなる発展と会員皆様のますますの活躍をお祈りしています。

口述筆記　佐藤　典子（孫）

歴史小説への挑戦

吉川　佐賢（昭和39年卒）

私は、自衛隊生活を終えるにあたり、今まで体験したことのないもので、社会に提言できたらと思い、歴史小説に挑戦することにしました。

元来、小説を読むのが好きで、外国文学や日本文学を問わず読みあさったものです。中でも司馬遼太郎や川端康成の作品は殆ど読みました。

特に、川端康成の『伊豆の踊子』を読んだときには、その躍るような文章表現に圧倒され、感動したことを今でも忘れられません。

私ごとき者が、人に感動を与えられるような文章を書けるとは思えませんでしたが、尊敬する歴史上の人物に、自身の真情を一生懸命注ぎ込んでみようと思いました。

歴史小説の場合、時代小説などのように、単なる虚構ではなく、歴史的事実に基づいてストーリーを組み立てるので、真実味あふれる迫力をもって、過去の教訓を、政治、国防、道徳などと、現在の社会へ提言できると考えました。

そこで、歴史を改めて学ぶ中、鎌倉幕府を倒し、建武の新政を実現させた最大の功労者である楠木正成に注目しました。

また、私はNHKの大河ドラマを観るのが好きで、過去の大河ドラマの主人公を調べてみましたが、楠木正成は取り上げられておらず、私は大河ドラマ化できればとの夢をもって、楠木正成をテーマとする歴史小説に挑戦しました。

楠木正成について研究してみますと、実に素晴らしい人物なのです。現在こそ、彼のようなリーダーが必要だと思いました。彼は、領国や国家の安寧と発展を目指して、優れた先見性と実行力を持って、強固な意志で困難な施策を実現していきました。その志高く、私利私欲に走らず、毀誉褒貶に惑わされずに義を貫いた彼の生きざまや理念からは、我々も学ぶべき点が多々あります。

彼の生涯について、五年半かけて書き上げましたが、出版するにあたり、無名で出版業界のことを何も分からない者にとって、大変苦労いたしました。初心者を受け付けてくれる出版社がなかなか見つからず、十数社回りました。中には悪徳出版社もあり、嫌な思いもしました。幸い小さい出版社ではありましたが、歴史小説『楠木正成　夢の花』に大変興味を持ってくれる社長に出会い、無事出版に至りました。

出版後は、友人有志により出版パーティを開いて貰ったり、自衛隊各所で講演させて頂いたり、それから催し物会場にて本を紹介したりと販売活動もいたしました。

その甲斐あってか、全く見知らぬ読者から電話や手紙で感想を貰った時には、本当に嬉しかったものです。中でも、楠木正成の末裔と名乗るご婦人から電話を頂き、その後お会いして楠木正成に関する系図での新しい側面を教わるなど、楽しい時間を持つこともできました。

また、私は現在、主として海上自衛隊の通信電子器材の整備や製造を行っている会社に勤務しておりますが、出版した本の話題作りなどで、円滑な営業活動ができていますこと、歴史小説に挑戦して本当に良かったと思っております。

現在は、処女作『楠木正成　夢の花』（上・下）を一冊に纏めております。まだまだ、駆け出しで、色々と試行錯誤をしながらですが、更なる新たな挑戦を生涯続けていこうと、著作に励んでおります。

（歴史小説家、海洋電子工業株式会社顧問）

人のために灯をともせば、わが前明らかなるが如し

谷 英也（昭和40年卒）

明春、母校を卒業して五十周年を迎えます。既に小学校、中学校では卒五十周年記念の集いが行われ参加しました。「ふるさとは遠きにありて思ふもの」――離れてこそ、支えてくれた存在の大きさが分かりました。

釈迦の伝説に四門遊観があり、いわゆる〝生老病死〟が人生の根本的な課題ということでしょうか。誰もが〝老〟と〝病〟と〝死〟を免れることができないと観念では理解していましたが、現在の年齢になり、実感している現状です。

わが町・東村山市は東京都の北西に位置する、人口十五万余の緑豊かな町です。同市では環境保全等に関する施策を総合的かつ計画的に推進するため、十年前から「環境審議会」を設定しています。同会は、学識経験者、事業者、市民の代表などで構成され、環境保全等に関する重要事項などについて審議します。私もその一員として、「再生可能エネルギーの利用促進」「低酸素まちづくりの推進」「大気汚染対策」など、施策に対する評価を審議しています。

二〇一一年三月十一日に二万人近い死者、行方不明者を出した東日本大震災の教訓、そして南海トラフ巨大地震や首都直下型地震などの大災害に備え、長期展望に立って市民の命を守る環境保全に取り組むことは喫緊の課題だと思い、委員の委託を受けました。

また、〝地球の宝〟〝未来の宝〟である孫たち、未来っ子たちに「環境を守り、豊かなこころを育む町」を遺してあげたいとの思いもありました。

わが町では太陽光発電システムの設置工事費用の補助や市内公共施設に太陽光発電システムを設置するなどの施策に取り組み、「大気汚染、PM2.5対策」や「都市生活型公害への取り組み」では騒音、振動、悪臭など環境状況の把握にも成果をあげています。

私は四十代の時に大病を患いました。数年にわたる治療が続きましたが、献身的な医師と妻の食事療法で薄紙をはぐように回復に向かいました。本当に多くの人々のお蔭と素直に感謝しています。〝自分もいつか元気になって、社会に還元できる何かがしてみたい…〟と思う気持ちが、また闘病への意欲につながりました。

十数年前から老人介護施設でのボランティア活動に参加しています。花見、買い物などに介護者の車椅子を担当し、介護者から感謝され、喜ぶ笑顔を見るのが嬉しい限りで疲れも癒されます。

また、NHK学園で介護福祉の講座を受講し、地域の社会福祉協議会や「ふれあいコミュニティー・センター」のボランティア活動に役立てています。

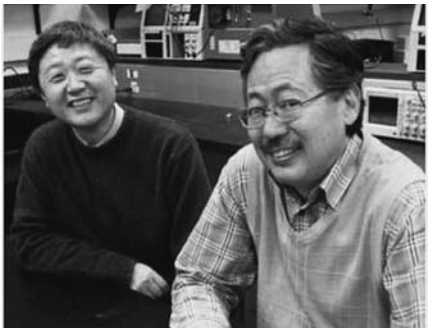
我が人生の恩師の言葉に「人のために灯をともせば、わが前明らかなるが如し」とあります。大病を克服できた経験から「報恩・感謝」の気持ちを忘れず、誠実と思いやりの心を持って人のために振る舞っていく晩年でありたいと思っています。

（東京都東村山市「環境審議会」委員）

インディアナ大学教授として

横田 博樹（昭和49年卒）

昭和四十九年に津高を卒業し四十年。その間、東京大学と宇宙科学研究所で十四年、その後アメリカのワシントン大学とインディアナ大学で生物学・医学の研究をして二十六年になります。宇宙工学を専攻していた時、スタンフォード大学に留学しNASAに出向いた事もあり、アメリカでの生活は合計二十八年。卒業後は大半英語を使っていたことになります。今回、津高同窓会誌に寄稿するに当たり、日本語の入力機能を急遽コンピュータに付け加えました。思えば落ち着きのない旅人のような生活で、家族の理解が得られて来たことが夢のようでもあり、ほんとうに感謝しています。



YC Bioelectric と言う会社を共同で立ち上げたDr.Chien（左）と著者（右）。

大学院生として、また教授として過ごしているインディアナで有名な物を挙げれば、カーレースのインディ500、プロスポーツのコルツ（フットボール）とペイサーズ（バスケットボール）でしょうか。州都のインディアナポリスから大学まで車で片道約四〇分、カーメルと言う郊外に住んでいます。カーメルは河内長野と姉妹都市で、今日九月二十八日のアートフェスティバルでは、日本のコーナーを家内が手伝っていました。あと二週間もすれば、州全土で百合の木を始め紅葉がきれいになります。

アメリカでも日本でも、大学で教授職を得ることはとても難しい。アメリカでの研究費獲得は過当競争で、僕の研究費は年間数千万円ですが、来年のことはNIHのレビュー次第です。今年は、大小合わせて既に二十以上の研究計画書をあちこちに提出しました。その合間に、年間五～十の論文を投稿します。嬉しいニュースは、約四年間いらした浜村博士が念願の教授職を歯学部で得られ十二月に日本に戻られます。日本人と結婚した中国籍のTu博士も、中国で教授職を得て十月に帰国されます。入れ替わるように先月、大阪大学医学部から皆巳博士がポスドクとしていらっしゃいました。

今夏、三重大学の内田学長が書かれた『何とかなる』をサンディエゴで頂きました。お育ちになった徳島の自然、ご両親のお教え、どうしてゴルフがお上手なのかを拝読いたしました。現在、骨と関節の研究をしていますが、内田学長をはじめ整形外科の須藤教授のお力添えで、昨年から三重大学医学部の研究員に来ていただき始めました。昨

年来られた西村先生は伊勢の出身で、今年の滝川先生は鈴鹿からと伺いました。津高の卒業生、大歓迎です。研究では骨粗しょう症・変形性膝関節症・骨形成不全症及び乳癌からの転移の新しい治療法を探しています。アメリカでは、八人に一人が乳癌に罹ると言われています。ドラえもんの話の中に出てくるようなミニチュアのロボットが、癌細胞を一つ一つやっつけるような細胞ロボットを是非作りたい。今の夢です。同窓生諸君、知恵の有る人は知恵を下さい。

津高校電気部同窓会のお誘い！

水谷　浩章（昭和46年卒）

事の始まりは平成二十四年の冬、一通のメールから始まりました。それは津高電気部時代、一年先輩であった加藤先輩からの「CQ誌に私の書いた記事が掲載されました。」というメールでした。CQ誌というのは毎月書店で販売されているアマチュア無線の専門誌のことです。

同期の平山君に「加藤先輩のCQ誌掲載のお祝い会と電気部の同窓会をしよう！」と持ちかけました。そして、平成二十五年五月四日に津駅近くで第一回となる「電気部同窓会」が行われました。

加藤先輩と46年卒を中心に、女性部員二名を含めた総勢十七名の参加となりました。「あの時あった無線機は誰々ので、今はどこそこにあるはずだ。」とか、「当時借りていた測定器部品を今日返します！」と言って四十二年ぶりに返上する等、懐かしい話であふれ、予定時間を二時間もオーバーしてしまいました。

その後の連絡用にと住所録やグループメールを作成し、その中では皆が楽しい昔話や現在の活動報告等を投稿して、今でも盛んに交流を続けています。私はその中で「津高電気部の歴史を調べてみたい。いつから始まって現在はどうなっているのか調べてみたい」と発言しました。

この時の津高電気部同窓会のことを加藤先輩がCQ誌に再度載せました。それからまた大きな波が起こることになりました。

その年の津高同窓会（八月）の後、同窓会事務局の方から「電気部の人と連絡を取りたい人がいます」というメールが届きました。それは55年卒の藤本君でした。しかし彼とは全く面識がなく、同窓会パーティで、藤本君は恩師である堀先生（昭和29年卒）から「電気部の人と連絡を取ってくれないか？」と頼まれたのだそうです。

津高電気部のQSLカードですが、JA2YALの学校のコールサインが取得できるまでの間、小林先生のコールサインを使用していました。それよりも津高が全て木造の画像が珍しいです。

堀先生は、五十五年当時の電気部の顧問であり、CQ誌の加藤先輩の記事を見て、津高電気部が同窓会をしているので会ってみたいと思ったそうです。

そこで、先生の担任していたクラスに在籍していて、電気部後輩の田中君を誘って二人で堀先生とお会いしました。堀先生は七十八歳とは見えず、とてもお若く現在八町に住んでおられ、今でもアマチュア無線をしてみえるそうです。

先生がお持ちだった「津高誌」の中に、電気部顧問をしていた今は亡き小林先生の電気部の記事がびっしりと載っていました。そこで我ら電気部同窓会のホームページに堀先生からお借りした歴代の資料を載せて、津高同窓会のホームページの中でリンクしてもらったところ、今まで知らなかった諸先輩の方々から資料や写真など、沢山の情報を提供して頂きました。

昭和25年卒の石田先輩からもメールをいただきました。石田先輩はJA2AHですから東海地区で8番目というとても早い取得です。現在八十四歳ですが、今でも津市内の自宅でアマチュア無線をされています。その石田先輩の同窓生である小林先輩が沢山の資料や写真を保存されていて、多くの情報を得ることができました。

ここで、アマチュア無線のコールサインについて少し説明します。津高のコールサインはJA2YALで、JAはJAPANの略、2は東海地区です。そしてYALを説明するとYは学校などに割り当てられた記号でALは受け付けた順番です。AAから始まってALは、東海地区で12番目に開局したコールサインなのです。とても早くからアマチュア無線を始めたクラブなのです。

戦後久居の陸軍兵舎を改造して津中を再開し、その時にできたのが、電気部の前身である「科学部電気班」でした。現在の津新町に津高校の新しい木造校舎が建てられ、電気部は体育館の東側に木造の部室を立ててもらいJA2YALを開局したのです。

情報を集めているうちに、先輩方や後輩に連絡を取って「再度電気部同窓会をしよう！」と声をかけたところ、沢山の人が賛同してくれました。そして今年平成二十六年五月四日に第二回目の電気部合同同窓会をプラザ洞津で行い、堀先生にもご出席頂きました。

会場ではプロジェクターで貴重な写真を映し出したり、中西先輩（44年卒）による、「仕事で十数年間アメリカ在住中、アマチュア無線のおかげで現地に沢山の仲間ができた話」などは、まさに趣味は言葉や国境を越える！です。バンド演奏をしたり、また53年卒の横田君が撮った「電気部部室と、長谷山でのCQコンテスト」の8㎜動画も上映され、とても楽しい同窓会となりました。

そこで、平成二十七年五月にも第三回電気部合同同窓会を行ないたいと思っています。ぜひご参加をお待ちしています。とても楽しい時間になると思います。

また、電気部の方々の情報をお待ちしています。ご連絡を頂いた電気部の方には『津高電気部部員簡易名簿』をお送りします。電気部同窓会ブログかメール「mizutani@kmj.biglobe.ne.jp」まで、よろしくお願いします。

2014年第二回電気部合同同窓会

「ぼったくりの人」と呼ばれて

倉田 江里子（昭和59年卒）

高校時代のニックネームは「おねえさん」だった。みんなから慕われる面倒見のいいお姉さんをイメージできて素敵な気分になれた。正直、年上扱いか、と落ち込まないでもなかったけれど私は春生まれでたいていの同級生よりも早く年を取るから事実ではあるな、なんて納得していたのだ。「お姉さん」ではなく「お姐さん」ではないかという噂に、しっかり耳を塞いだことは言うまでもない。

大学でのニックネームは「組長」。これは高校時代に身を捧げた生徒会活動の名残で、手を上げる者がいなかったクラス役員に立候補したせいである。それにしても、そのまま級長と呼んでくれればいいのに何故そんなヤクザまがいの呼び名をもらわねばならないのだ、といささか不本意であった。

学生生活を終え就職したあとのニックネームは、ありがちな名前をもじったものとなり、しばらくニックネームに心を惑わされることはなかった。

そして今、私は「ぼったくりの人」と呼ばれている。

もうお姐さんもヤクザもびっくりである。ことの原因は、子育ても一段落し、時間を持てあました私が若かりし頃の夢を思いだし、よたよたとその夢を追いかけた挙げ句、辿りついてしまったことにある。

二〇一二年に小説家の端くれとしてデビューし、今までに七冊の本を出した。その最新シリーズのタイトルが『居酒屋ぼったくり』である。ドラマにしても映画にしても、監督の名前を覚えているのはごく一部。たいていはタイトル止まりであろう。書籍にしても同じで、作者名（秋川滝美）なんて忘却の彼方、頭に残るのはタイトルのみ。そして、それを書いた人は「ぼったくりの人」ということになる……らしい。

なんというニックネームだろう。たとえ本の中身が、酒と料理が満載の人情話だったとしても、実際に口に出されるのは「ぼったくりの人」、人聞きが悪すぎる。なんとかならないものか。だが、その考えは大間違いだとすぐに気付いた。

「おねえさん」と呼ばれていた頃、心の底に大事に抱いていた「小説家になりたい」という夢。

人生の途中で、見ないふり、忘れたふりをしてきた夢は、それでも息絶えることなく心の底を流れ続け、五十歳を目前にして地上に噴き出した。その結果が「ぼったくりの人」であるならば、それは私が夢に手をかけた証、大いに喜ぶべきことに違いない。

そんなことを考えているときに、同窓会報に記事を書いてほしいという連絡を頂いた。電話の向こうから聞こえた第一声が『居酒屋ぼったくり』の……？」であった。光栄至極である。

夢は諦めなければ叶う、とまでは言わない。けれど、追い続ける限り夢であり続ける。彼方にある夢を追うために目を上げ、頭を上げて進んでいける。だから、夢を手放さないでほしい。忘れていてもいいから、心のどこかにしまっておいてほしい。そうすれば長い時を経て、ひょっこり手が届くこともあるのだから……

ただし、久しぶりに再会した夢は、人聞きの悪いニックネームなどというちょっとしたアクシデントを連れてくる場合もあるから要注意である。

最後の日本兵

林 英一（平成15年卒）

高校時代について、この場で語るほどの思い出は、あいにく持ち合わせていない。

それでも、誰しもがそうであるように、私も同時代的状況の虜であったことは否めない。

小泉純一郎首相の誕生と靖国参拝による日中韓関係の悪化、アメリカの同時多発テロ事件とイラク戦争。いま振り返ると冷戦後の秩序が転換する過渡期に高校生活を送っていたということになる。

その当時の私の最大の関心事は、戦争責任問題にあった。

戦争体験の被害と加害をめぐる論争に興味を覚えた私は、三重県の戦争体験者への聞き書きを試みた。なかでも忘れられないのは、桑名で出会った近藤一さんのお話である。中国と沖縄の最前線で戦った近藤さんは、被害者であると同時に加害者でもある自らの過去を赤裸々に語ってくれた。ときに泣き、妖しげに笑う姿に、私は共感と違和感の両方を抱いた。

その後、慶応大に進学した私は、平凡なキャンパスライフを送っていたが、二〇歳の夏休みに大学の海外研修でインドネシアを訪れたことがきっかけとなって、再び戦争の問題と向き合うこととなる。

インドネシアは、それだけで東南アジアの人口のおよそ四割を占める、世界最大の島嶼国家である。その中心地であるジャワは、国土面積の上では全体の七%にも満たない小さな島であるが、約一億五〇〇〇万の人々が密集する地域でもある。長らくオランダによる植民地化の影響を受けてきたが、一九四二年に同地を占領した日本軍によって三年半にわたり統治され、オランダとの四年半の独立戦争を経て主権を獲得した。

研修先のマランは、東部ジャワ第二の都市で、標高三六七六メートルの円錐形の火山・スメル山を仰ぎみることができる、美しい景観の街並みだった。戦時中、日本の富士山を懐かしんだ日本兵たちは、「皇山」と書いて「スメル」と読んだ。その山の東麓の農村で老後の余生を送っていたのが、小野盛

最後の日本兵
故・小野 盛さん

さんだった。

小野さんは初対面の私に、数時間にわたりまくしたてるように語りかけた。その姿に圧倒されながらも、私はこれまで知らなかった歴史に出会い、驚いた。小野さんは、大日本帝国崩壊後も現地に留まり、独立戦争に参加した残留元日本兵だった。

旅先で人は見たいものしか見ないという。はじめて訪れた異国の地でいろいろと見聞しながら、結局私がもっとも興味を抱いたのが小野さんであったのは、高校時代の問題意識が影響していたのかもしれない。

その後、私は小野さんの生きられた歴史を一〇年かけて追い続けることになるのであるが、詳細は紙幅の都合で割愛させていただく。ご関心の向きは、拙著『残留日本兵』（中公新書）、『戦犯の孫』（新潮新書）等をご高覧いただければ幸いである。

師であり、恩人であった小野さんは、二〇一四年八月二十五日に他界された。九四歳。インドネシアで生存が確認されている最後の元日本兵だった。

同年一月十六日に逝去した小野田寛郎さんを含め、残留日本兵はアジア各地でおよそ一万人発生したと推測されている。彼らの戦後は依然として多くの謎に包まれており、その意味を明らかにすることが、私の今後の課題である。

津高同窓会旅行

内保　忠勝（昭和36年卒）

その朝、集合場所、母校の庭は万朶の桜花で吾々の邂逅を祝してくれる見事なものであった。

今回の津高同窓会「バリ、ボロブドゥールの旅」は飯田会長以下一七名で出発した。多くも少なくもない頃合の人数である。連合いの同伴も可ということで私達はその中に入れてもらった。これは私にとって大変ありがたいものであった。

この同窓会の旅はほとんど初対面に近い人達の集まりで、海外旅行を企画された幹事どのにはさぞ心配も多いことと思うまもなく、自己紹介をすませて関西空港に着いたときには何の違和感もない一致団結の立派な集団となれた。

不思議なところにきた。

「ボロブドゥール」

私はそれが最初に目に飛び込んだときなぜか初めてのものでないように思った。たしかにいつかどこかで見ている、もう識っている、なつかしい風景に思えた。椰子林を睥睨してその躰を天に曝す仏塔は千三百年の沈黙を崩さず、まるでニヒリスティックに迎えてくれた。

八層の基壇の頂上にある鐘形のストゥーパーは全て安山岩の切石で積み上げられている。

大日・弥勒・普賢・釈迦・仏さまの龕のお前でくり拡げた伊勢の善男善女の訛りのひびきは見事な夢の世界となった。

昔、私の父がこの楽園にきて世界に干戈をむけたというのも嘘のようであった。

南国の海風はここちよい。

そう、これは夢で見た風景に違いない。

二連泊の宿「ジャク・アマンジウォ」も幹事どのの気配りが十分な最高級のものであった。小高い丘の上に在って密林の樹上にはるかにボロブドゥールの遠姿がいつでも見える設営になっていた。その姿はやはり沈黙の凍結であった。

旅の解散場所、母校の桜はもうほとんど蕊になっていたが、まだ名残りの花びらが散っていた。

学年対抗ゴルフ大会

山家　泉（昭和42年卒）

毎年恒例になっている同窓会学年対抗ゴルフ大会が平成二十六年三月二十三日(日)に伊勢中川カントリークラブで開催されました。

昭和二十六年から平成五年までの卒業生総勢百七十二人が参加し、対抗戦で大いに盛り上がりました。

好天に恵まれ、全員が好スコアを目指してスタートして行きました。我々42年卒は二度目の優勝を目指して参加しましたが、スコアが伸びず今年の優勝は無理かと思っていました。

プレー後の表彰式では同窓会会長の挨拶の後、全員和気あいあいのうちにパーティが進みました。我々のメンバーの一人がものすごいハンディキャップをいただき幸運にも二度目の優勝を達成することができました。頑張ってくれた南君、細川君等に感謝感謝です。

結果は、上位三名のネットスコア合計で一位 42年卒二二〇・六、二位 33年卒二二一・〇、三位 44年卒二二一・〇（二位、三位は四番目のスコアの上位）

個人の優勝は35年卒の加藤健治さんでグロス七十九ハンディキャップ九・六、ネット六十九・四でした。

来年も大会が開催されることを願って閉会となりました。

42年卒の同窓の諸君、年五回奇数月にコンペを実施しています。希望者は学年幹事青山幸雄君（090―3467―8177）まで連絡ください。

◆有造塾が開催されました！

第4回

日時　平成26年9月30日(火) 13時45分～15時30分
場所　津高等学校　理科棟4階　地学室
〈演題〉「おやつカンパニーの成長戦略と考え方」
〈講師〉松田好旦氏（昭和42年卒）
㈱おやつカンパニー代表取締役

有造塾に参加して

2年　魚住あかり

今回の有造塾で聞いた「成功者」と「失敗者」の話が私の中で一番印象に残っている。「成功者」とは考え方がポジティブで失敗を糧に成長していく人。「失敗者」とはその反対だ。松田さんの話は、その二人を対比させながら成功の秘訣を学ぶというものだった。

「成功者」と「失敗者」を分ける一番大きなものは何なのか。それは、最終的な目標があるかということだと私は思った。

「成功者」である松田さんの会社経営は大きな視点を持って、利益を求めることを大事にしている。言い換えれば、最終的な目標に向かう道筋を描くことを大切にしているのだ。松田さんには「会社を成長させる」という明確な目標があった。だからそのために会社名を変えるなど思い切った改革をし、周りの反対を押し切ってレギュラースナック業界に参入したのだと思う。また、松田さんはどんな仕事も断らないようにしているという。やはり、それは様々な仕事の経験を通して自分を成長させ、会社も成長させるという強い意志があるからなのだろう。

おやつカンパニーは現在ラーメンスナック業界一位の会社だ。それでもなお、十年先、二十年先の成長を見据え戦略を練る松田さんの姿勢に私は驚かされた。

最近の進路関係の集会で私がもらったプリントには「人生の舵をきれ」や「自主自律」という言葉が並ぶ。今回得た「成功するためには明確な目標を持たなければならない」という教訓は、それらを実践するために重要なのではないか。定めた目標に向かって自分を律し、進んでいけるようになりたいと感じた。

「成功者」と「失敗者」の話のほかにも松田さんからはたくさんのことを聞いた。活発な意見交換をする方法や、社員の心の掴み方などはもっと聞いていたかった。

正直に書くと、私は今回の有造塾に、お菓子のプレゼントがあるという宣伝文句に惹かれて参加した。しかし講演が終わった後には、袋いっぱいのお菓子よりも松田さんの話に満足し、今日得た教訓を今後どう活かすかを考えている自分に気がついた。

第四回津高同窓会テニス大会

2年　三石秋澄

第四回津高同窓会テニス大会が、十月十二日(日)に、津高テニスコートで開かれました。台風の心配もありましたが、生徒十八名、OBの方五十四名の参加で、活気溢れる大会となりました。現役高校生から、現在八十才の方までが、八グループに分かれて団体戦を行いました。幅広い年齢層で、テニスという一つの競技をする機会はあまりなく普段とは一味違う一日になりました。

試合では、皆さん勝ちにこだわりつつも、本当に和気あいあいとテニスを楽しまれていました。また、試合の合間や昼休憩などで、OBの方とたくさんお話しをさせていただきました。皆さんとても気さくな方ばかりで、楽しい時間はあっという間に過ぎていきました。

また、コートにいる全員が、津高でつながっていると思った時、長い歴史と伝統を感じました。OBの方々も、現在の自分達と同じようにテニスをされてきて、今、こうして自分達と同じコートの中で、一つの球を一緒に追いかけていることに、不思議な感覚を持ちました。多くの先輩方と、これからも続いていくであろう後輩達と、テニスを通してこの様な形でつながっていけることに、大きな喜びを感じました。また来年も再来年も、こうして津高というつながりの中で、テニス大会が開かれるといいな、と思いました。

最後に、このような機会を設けて下さった同窓会関係者の皆様、OBの方々、先生方、ありがとうございました。

国体山岳競技優勝

1年　田嶋　あいか

十月十一日(土)から、朝鮮半島の南部に位置する木浦で開催されたクライミングのリードワールドカップに出場してきました。そこでは決勝に進出することができ、八位に入賞しました。

十月十三日(月)には関西国際空港から学校に行く予定でしたが、台風19号の影響で欠航となってしまい、仁川空港で夜を明かしました。

結局、三重に戻ることができず、直接九州入りし、長崎国体に出場する事になってしまいました。

身体の疲れを取ることもできないまま、国体の第一日目を迎えました。

本来クライミングは完全に個人競技ですが、国体のみ二名一組でチームを組みます。その両名の到達高度の合計がその県の成績となります。

一日目はリード競技です。これはロープをつけ、高さ十五㍍以上の壁を登り、その高さを競うものです。三重県チームは無事両名とも完登（最後まで登りきること）し、一位通過しました。

二日目は、ボルダリング競技です。これは高さ五㍍の壁を、ロープをつけずに登ります。時として、リード競技はマラソンに、ボルダリングは短距離走に喩えられます。三重県チームは、二日目のボルダリング競技は予選三位で決勝に駒を進めました。

決勝では疲労もかなりピークになってきていましたが、午前中のリード競技ではただ一人の完登で個人順位一位の成績、パートナーの順位も四位だったので合計成績が一位で、優勝することができました。これは去年の東京国体に続いて二連覇です。

午後からのボルダリング競技の決勝では、東京チームに負けてしまい、二位でした。これも去年の東京国体と同じ結果だったので、本当は全種目制覇したかったのですが、とても残念でした。

長崎から帰ってきてからは、いつもの高校生活がはじまりました。二週間近く学校に行かなかったので、机の上にはたくさんの課題が積まれていました。今、その課題を少しずつはかしていますが、週末には千葉でワールドカップがもう一戦あります。

学校に行き、課題をこなし、トレーニングをする。決して楽な毎日ではないですが、今しかできない事を経験していろいろな事を吸収していきたいと思っています。

リード競技に挑む田嶋さん（右）

津高校進路指導状況

進路指導部　林　仁大

平素は、進路指導部の教育活動についてご理解ご協力を賜り、心よりお礼申し上げます。

現在、生徒は夢や目標に向かって切磋琢磨しています。私どもは、その実現のために、高い志のある、たくましくしなやかな心を持った人間になって欲しい、そして将来、高い知性と教養を持ったリーダーとして活躍して欲しいと日々接しています。そのような中、本校では将来を考えて自分に必要な力を主体的に獲得しようとする「人間力」の育成を主眼にした取組をしています。これには同窓生の皆様にもご尽力いただいており、改めてお礼申し上げます。また、生徒の学力向上を目指すべく、根幹である授業を中心に学習指導の充実に取組み、一人ひとりの進路実現に向けきめ細やかな指導を心懸けている次第です。

今春の進学状況は、国公立大学合格者においては二八一名でした。これは地元三重大学合格者七八名等とともに県内の高校では最も多く、難関大学合格者も含め、卒業生各々が志のもとに努力した結果だと考えています。

今後とも生徒の思いを大切にしながら努力して参りますので、ご指導いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

（大学合格者数）

（2014年４月16日現在）

	国立	公立	私立	短大
(2014) H26年	230	51	766	16
(2013) H25年	207	34	535	14
(2012) H24年	237	26	762	21
(2011) H23年	186	43	668	8
(2010) H22年	221	39	764	6

	北海道	東北	筑波	お茶の水	東京	一橋	東工大
(2014) H26年	7	1	8	0	4	0	0
(2013) H25年	10	1	2	1	4	1	0
(2012) H24年	6	1	0	0	5	1	1
(2011) H23年	8	3	4	0	2	2	1
(2010) H22年	8	2	1	0	4	2	2

東京外大	横国大	静岡	金沢	信州	名古屋	名工大	名古屋市立	三重	県立看護	京都	大阪	大阪府立	大阪市立	神戸	奈良女	広島	九州	慶応	早稲田	上智	青山学院	中央	東京理科	日本	明治	法政	立教	南山	名城	皇學館	龍谷	京都産業	同志社	近畿	立命館	関西	関西学院
1	6	9	4	10	15	5	5	78	4	10	14	13	5	11	2	7	0	2	17	1	5	13	27	11	20	5	7	61	49	27	11	10	76	27	116	50	11
2	4	8	3	6	8	6	4	75	1	15	17	5	5	12	2	2	2	3	17	5	3	7	18	2	17	8	8	25	15	27	6	14	59	21	70	26	18
0	5	4	7	4	17	13	4	75	0	13	26	3	4	14	3	4	1	4	11	2	5	14	11	6	17	13	10	56	32	23	16	3	88	37	101	30	18
0	1	6	6	3	14	9	7	57	1	10	18	4	5	9	0	5	1	12	17	5	3	8	13	4	11	5	3	46	34	31	20	7	75	11	91	44	23
2	3	2	12	5	16	4	1	51	3	15	32	5	4	12	3	4	0	19	20	4	5	22	22	3	31	9	5	50	32	24	10	3	98	27	111	47	27

岡村初博元同窓会長を偲んで

近藤康雄（昭和26年卒）

「いや、ゆっくり聞こう」

議員が強い自己主張を延々と始めた時、岡村市長は気短と聞いているし、怒り出さないかなと思って私が「一言説明しましょうか」と申し上げた時の返答。

誠実な人だと思いましたし、これが老練かなと感じましたね。

「津市は難しい市であったと」後年に回顧しておられましたが「聞く」このことが五期二十年、津市長として見事に舵をとられた姿勢でもあったと思います。

改革を標榜する人、時の政府に異を唱える人が地方の時代の代表者としてよく登場しますが、岡村さんが、俺は「水市長」と自称して尽力されたのが市街地の排水対策でありました。

地方自治体が住民のためにやらなければならない仕事は何か、「治山、治水が政治の基本で忘れてはならない」とは私達への教訓であり実行された事でありました。

浸水が少なくなった事は偶々ではありません。

市長退任後、四期八年余り同窓会長として、その発展に尽力された岡村さんは本年一月五日逝去、享年九十歳、謹んで哀悼の意を表します。

また、津高同窓の諸氏には「有造館」以来の自主自律の伝統の上に「俺が、俺が」という気概も加えてほしいなとよく言っておられた大先輩でありました。

各地で同窓会開催

東京同窓会

本年の東京同窓会は、快晴に恵まれた真夏日の中、五月三十一日(土)霞が関ビルにある東海大学校友会館で盛大(167名参加)に開催されました。

美宅成樹氏（42年卒）の講演から始まり、谷　篤氏（54年卒）の開会の歌を経て、本会田村会長の挨拶、飯田本部会長、小野学校長のご祝辞と続き、その後お招きした伊藤昭彦、土方一夫両先生のご紹介、奥田大阪同窓会会長のご発声で乾杯へと進みました。

本年のテーマは、「縦の交流」。学年を越えた交流を深める為、趣味による席替えを行い、世代を越えた交流を図りました。

会の終盤、前迫實氏（42年卒）による独唱は、大変盛り上がりを見せ、最後に谷氏の指揮により校歌斉唱を行い、閉会となりました。

中橋卓嗣（昭和42年卒）

名古屋同窓会

本年度津高名古屋同窓会は、九月二十日(土)名古屋東急ホテルにて開催されました。

一二〇名余りの同窓生が集まり、昨年同様大変賑やかな会となりました。

講師に島津製作所会長の服部重彦さまをお迎えし、京都に関する大変興味深いお話をユーモアまじえながらお話頂き、貴重な時間となりました。

恒例の○×クイズでは、現在の津高校に関する問題はもちろんのこと、八月に三重を襲った集中豪雨、今夏三重県を熱く元気づけた高校野球に関する問題も出題され、卒業年度別に分かれたテーブルごとに競い合い、先輩方の地元愛、母校愛を強く感じました。

私、個人的な感想と致しまして、今回この名古屋同窓会に現役大学生が参加してくださったこと、何より嬉しかったです。もっともっと若い風が吹き、校舎では顔を合わすことのなかった先輩後輩同士が一体となって今後も同窓会が盛り上がっていけばいいなと思います。

田中千裕（平成20年卒）

大阪同窓会

平成二十六年十一月九日(日)に天王寺都ホテルにおいて一四〇名の会員が出席し、大阪同窓会が開催されました。

奥田会長、来賓の方々のご挨拶ののち、大阪市立大学名誉教授・愛知学院大学教授である玉井金五さん（43年卒）の講演「日本の公的年金改革を考える」がありました。年金問題について大いに理解を深めることができました。その後、乾杯に移り、乾杯のご発声は戸澤又手（ゆうほう）様（17年卒）、各テーブルでは恩師や旧友との再会に話が弾むなか、現役学生の紹介のあと、アトラクションとして山松康男さん（43年卒）他によるバンド「ホクセッツ」の演奏をバックに、土屋久美子さん（43年卒）の澄んだ歌声が会場全体に響きわたりました。校歌斉唱、「ふるさと」を全員で大合唱し、来年度の再会を約束いたしました。

岡村陽子（昭和43年卒）

お知らせ

平成二十七年度　**同窓パーティー**

日　時　平成二十七年八月一日(土)
　　午後三時より

場　所　津センターパレスホール五階
　　津都ホテル五階

テーマ「繋ぐ―世代を超えて―」

担当学年幹事　昭和57年卒（代表　田中康一郎）
　　平成6年卒（代表　世古真沙子）

平成26年度総会・パーティーを終えて

実行副委員長　北川　健太郎（平成5年卒）

雨の多かった今年の夏が終わりを迎えようとしています。八月二日土曜日の午後も、にわか雨が降っていました。そのような中、今年も津都ホテルとセンターパレスを会場に平成二十六年度津高同窓会総会・パーティーが開催され、八百三十五名の同窓会員の方々にお集まりいただきました。

さて、当日は十五時より本年度の総会が開かれ、物故者への黙祷、飯田同窓会長、小野学校長のご挨拶、代議員会の報告が行われました。続いて十五時三十分からは、パーティーに移りました。本年のパーティーは、「礎～ここから～」がテーマでした。アトラクションは、高校時代の懐かしい写真を当時流行の曲に乗せて、仲間とともに振り返るスライドショーとなりました。仲間と語らいながら、昔を懐かしんでいただけましたでしょうか。そしてサプライズ企画として、幹事学年一同のフラッシュモブ（集いながらの合唱）をさせていただきました。最後は、応援団OBによる演舞で校歌を斉唱し、パーティーは幕を閉じました。

今回のパーティーでは、感極まり涙を流される先輩の姿を拝見しました。改めて陳川・三重桜・津高というものが、皆様方の「礎」であると気づかされました。そして、幹事学年としても達成感を感じた瞬間でした。

母校をよりどころに、同級生・先輩・後輩とつながり、そして、母校を誇りに思える私たちは、大変幸かと思います。今後も、津高校の歴史は、刻まれていきます。益々の発展を期待しております。

最後に、今年度の幹事学年としては、「おもてなし」の気持を持って努力させていただいたつもりですが、いたらぬ点等も多々ありました。お詫び申し上げるとともに、皆様のご協力により無事会が終わりましたことにお礼申し上げます。

平成27年度同窓会を担当するにあたって

実行委員長　田中　康一郎（昭和57年卒）

母校が創立百三十五周年を迎え、陳川・三重桜・津高の同窓会が統合して五十五周年となる平成二十七年度総会パーティーは、昭和五十七年卒と平成六年卒が担当させていただきます。

歴代の担当学年のご努力に深く敬服いたしますとともに、次年度同窓会幹事の大変栄誉なお役目をいただき、改めてその責任の重さに身の引き締まる思いです。

今夏の総会パーティーでは、心温まる演出に感動を覚えたとの声が多数聞かれました。私達も諸先輩方の立派な運営に少しでも近づけますよう、精一杯準備をいたして参ります。

次年度は「繋ぐ―世代を超えて―」をテーマに、世代を超えて母校と同窓への誇りと共感を伝え合うと共に、和やかで居心地の良い同窓会を楽しんでいただけますよう、心からおもてなしさせていただきますので、皆様のご参加を心よりお待ち申し上げております。

事務局だより

○会報五十二号をお届けします。今回は二万五千部の発行となりました。

○来年は津高創立百三十五周年にあたります。種々の事業を企画致しましたので、積極的なご参加をお待ちしています。

○名簿発行にあたり、住所確認はがきのご返信、ご協力等ありがとうございました。今後の住所変更は、卒年・名前・新住所をお書きの上、ハガキ・FAX・メールにて事務局までお知らせ下さい。

○事務局は、月・火・水・金曜日の午前九時十五分～午後四時十五分開局しております。

○ホームページのアクセス数も十万回となります。最新情報は、是非、ホームページをご覧下さい。

津高同窓会のホームページ

http://tsuko.jp/

メールアドレス
office@tsuko.jp

TEL・FAX 059-229-7331